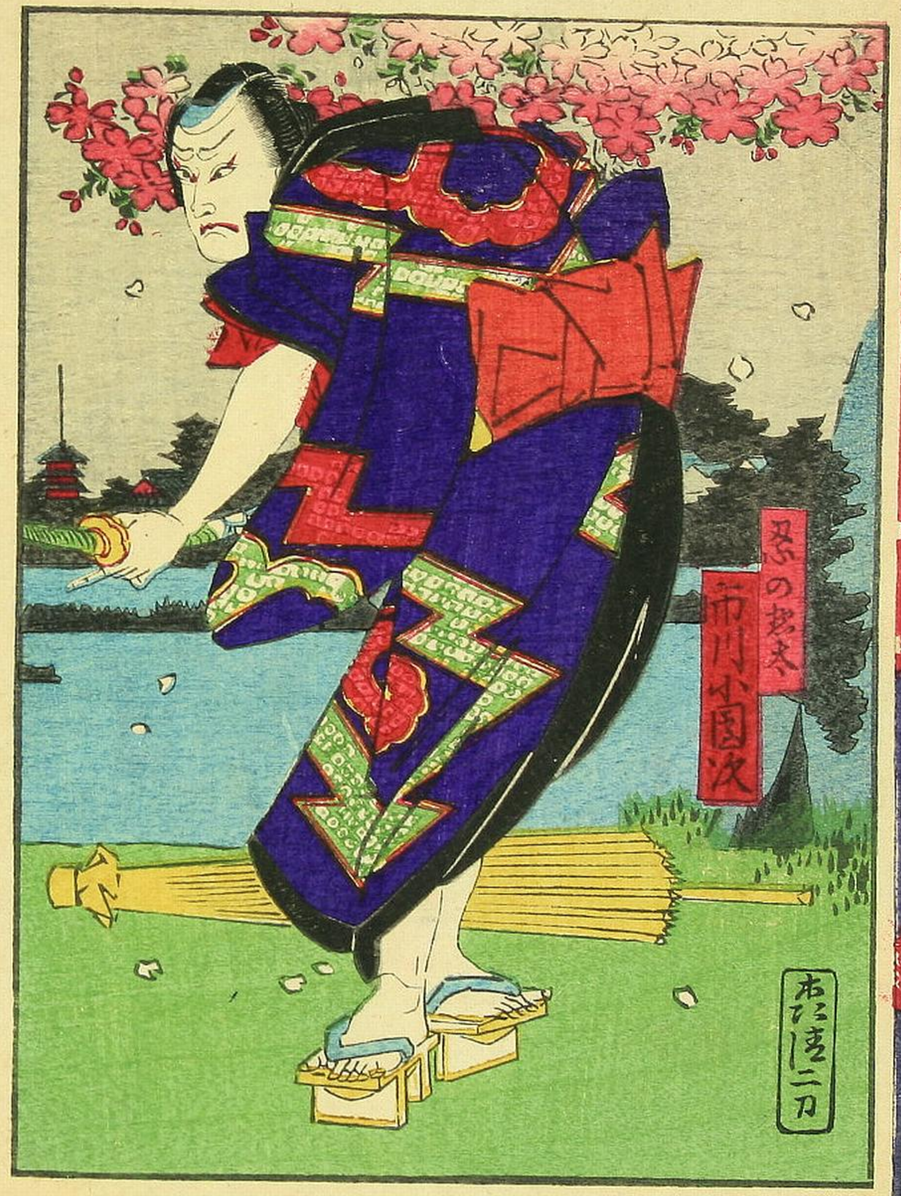
妻三重野長振袖
貞秀

A 744



98-8088

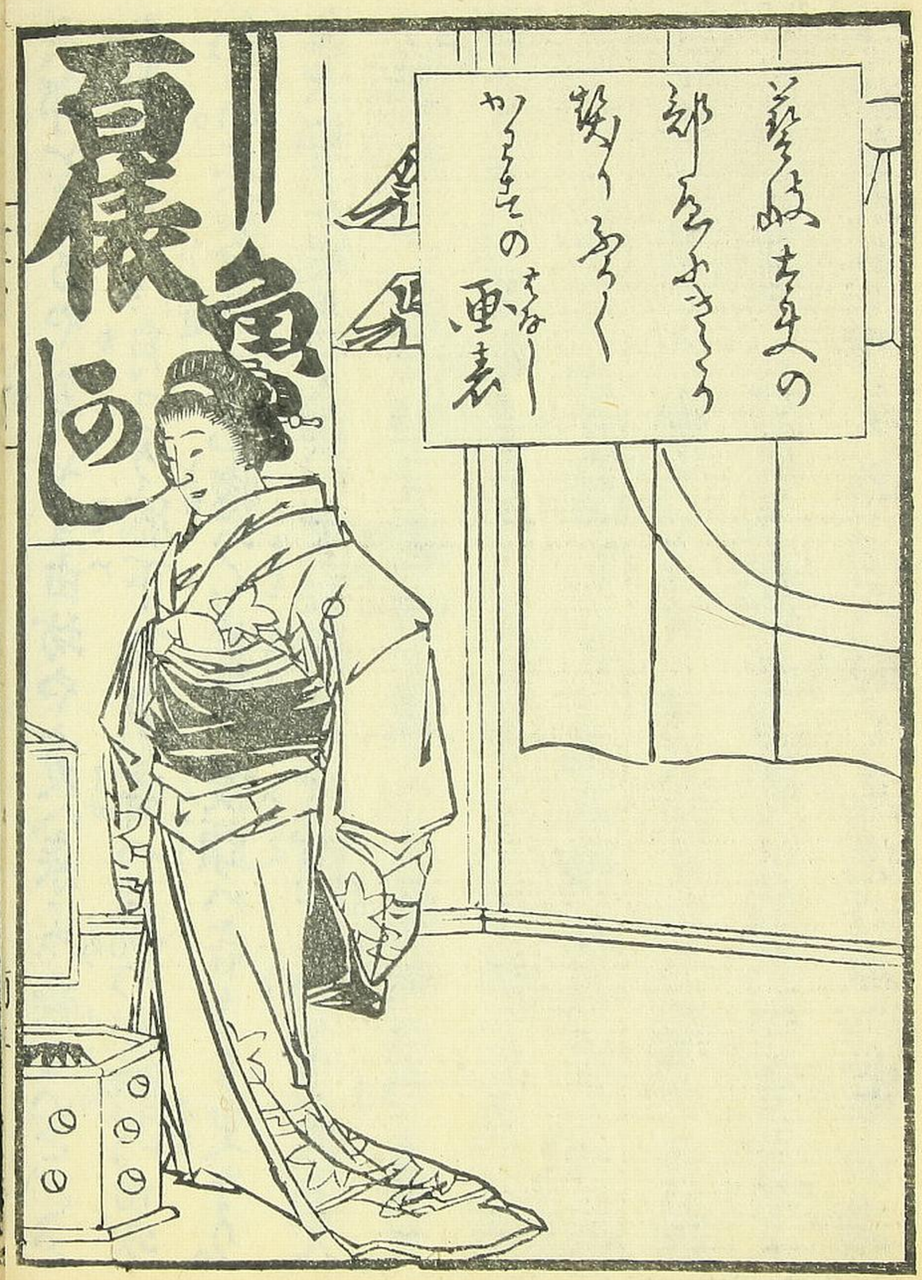
沢村田之助
病原節書

妻重艶男不理袖前　編輯長尾吉之助

夫と天地に不時の風雲あるべし。小天地なる人躰に於て。時として。内患外傷発らざると得ず。と虫ども。天地の論い姑らく閣捨。小天地の人躰に有るハ素之貴重なる人命の。其大ひなると忘るゝ故に。内ハ淫食の度を過まち。外ハ厳重に保護せざるゝ故に。既に父母の賜物を破るに至る。此悲患を救助ん為。和漢洋共に。古昔より神人出て。此道に良法を究めつゝ。さるとバ天命の尽く限にあらざれバ。一人として愈治せざるハなし。と虫ども。其症に至つてハ又不具の身に成ざるを不得。是皆平常に衛生の方法に忘るとい虫ども。此外に他人

の怨念に因りて難疾を病む事あり。是釈氏の所謂因縁宿業と唱へて。別流に出るに似られど。必らず此方に悪事なく無んば。何方より恨を報さん。是皆人心の招く所にして。厳重衛生の良法に類せ。爰に他人の為に怨を受て。一大病を煩ひし譚あり。怪力乱心の笑ひと忍びて。今繙開く所を聴玉へ。俳優沢村田之助なる人の。怪疾病し概略なり。此沢村田之助氏は江戸(方今東京後倣之)名代俳優助高屋高助(沢村宗十郎)の次男にして。幼名を由次郎と唱へしゞ。生質なる美男子にして。畫ける在五中将も三舎を避るの粧ひありて。其形姿の嬋娟なるは風に縺る春柳の。新芽を花と見る如く。又面体の美やなるは限なき秋の月影の玉に露吐く如くにて。素より技芸も切者にして。時は安政二年の頃田之助の由次郎は。弱冠十才の小童なりしゞ。市川小團治の座組にて。役前は角田川の段にて。梅若丸を勤めたりしに。扮形は緋ぢりめんに繻摸様。丸絣帯に紫裾濃の袴を着け。唐子髷に小刀を指し。小團治の忍の岡の惣太と。橋掛よりの羅苛詰め。最も憐れみる又優しくして。看官は涙涕を拭ひヤヤ〳〵と賞賛せ。中に一人の僧ありて其人品も殊勝ふして。是なん上野下谷なる生池院(實は養

池院なるが生池院と兼帯せし（故斯く云）の任職なるが。此
由次郎が容貌々々。又藝術の精密なると。恍惚として
感じ入り。自己が茶屋なる若い者に何角咽を祇へ
そつと。落ちへ頼むの謎掛にて。言ふ心の口なしう。山吹色
とぞ知らるとなる。早舞臺あい狂言涙てカッチくの木が
這入り。幕が閉塞べ生池院に依頼さまなる若い者へす
ぐと三階紀の國屋（沢村氏の家号）の部家に到るて
通じなるべ。由次郎へ梅若丸の扮形の侭門人なる伊太郎
に買ひなが。三丁目なる裏茶屋の紀の國屋へ来るう
なるべ。彼の生池院も此所に疾ゐも来るうと待受て。由
次郎を見るや不吉。ヤヨ由坊や爰へ来よ。疾くいざくと
掌を取つて。自己が脇下へぞ引寄つ。撓つ透眼つ由次
郎の其容貌を見惚つく。菓子饅頭へ言うも更なり。
由次郎が好なる品へ。望に任せて代價を厭ずず。其商人
に購求して。由次郎が機嫌を取り。又藝術の巧を成と。
賞をやし。其麝美へ是おまをうと。子細へ何角白紙
に。包まを遣りしへ菓子なるぞ。流石僧逆佛様の呼鞋
百枚由次郎の。袖うらゆつとう落をとう。我身も落
る煩悩の曇りに空も墨田川。深き思ひへ梅若の色よ
き返事へめりやなしや。心に招く尾花の袖の露に濡


晨の色

拾円頂戴
田の助さん
夏化粧

まるハ武藏野の果こそ知しとね紫の由縁の神や結びぬる。
是由次郎ゞ難病と煩う初めと知らるとゝり。偖も東郎
の美男なる事。前条に述る如く。後に田之助と成るに到つ
ても。其評判ハ弥層高く。贔屓の婦女子ハ言うも更な
り。既に我邦に妾を求る外域赤髭先生も田之助嬢あり
外うとハまぢ眼ゟ見ぬ田之助なれど名と聞く而已に
其美と知るハ是評判の高さゞ故なり。由次郎梅若の
大當りと取り秋大阪下り（方今ハ大阪上り）尾上和市（尾上
多見蔵の倅）石川五右ヱ門と勤しゞ。此時由次郎ハ倅五郎
市と相勤め。父五右ヱ門と諫る諭賊なり實母と慕うの
情愛刺鍵の地もあき大入の。客も不残是ゞ為。声を
外ゝ袖を絞りて泣ゝざる人とそ無ゝる。偖此時も前文
にある。忍の岡下天龍山。生池院も由次郎ゞ。高評あると
瓜に悦び見物にこそ来りゝるゞ。今日ハ二丁目中菊なる。
長吉方ゟり接敷を取らせ餘の俳優ゟハ眼も遣らず。由
次郎而已に涎を無らして。恍惚とて見入しゞ。早其幕
も閉り色べ名にし屑くる由次郎なるとハ數多贔屓の
客ゟりして爰ゟ彼所と呼び入るゞ。如何なる子細ゟ由
次郎ハ今日に限つて頭を振り。今日ハ何処へも行く事ハ。
否ざくと素振ゟ色べ平常の氣隨と知りなゞ。流石

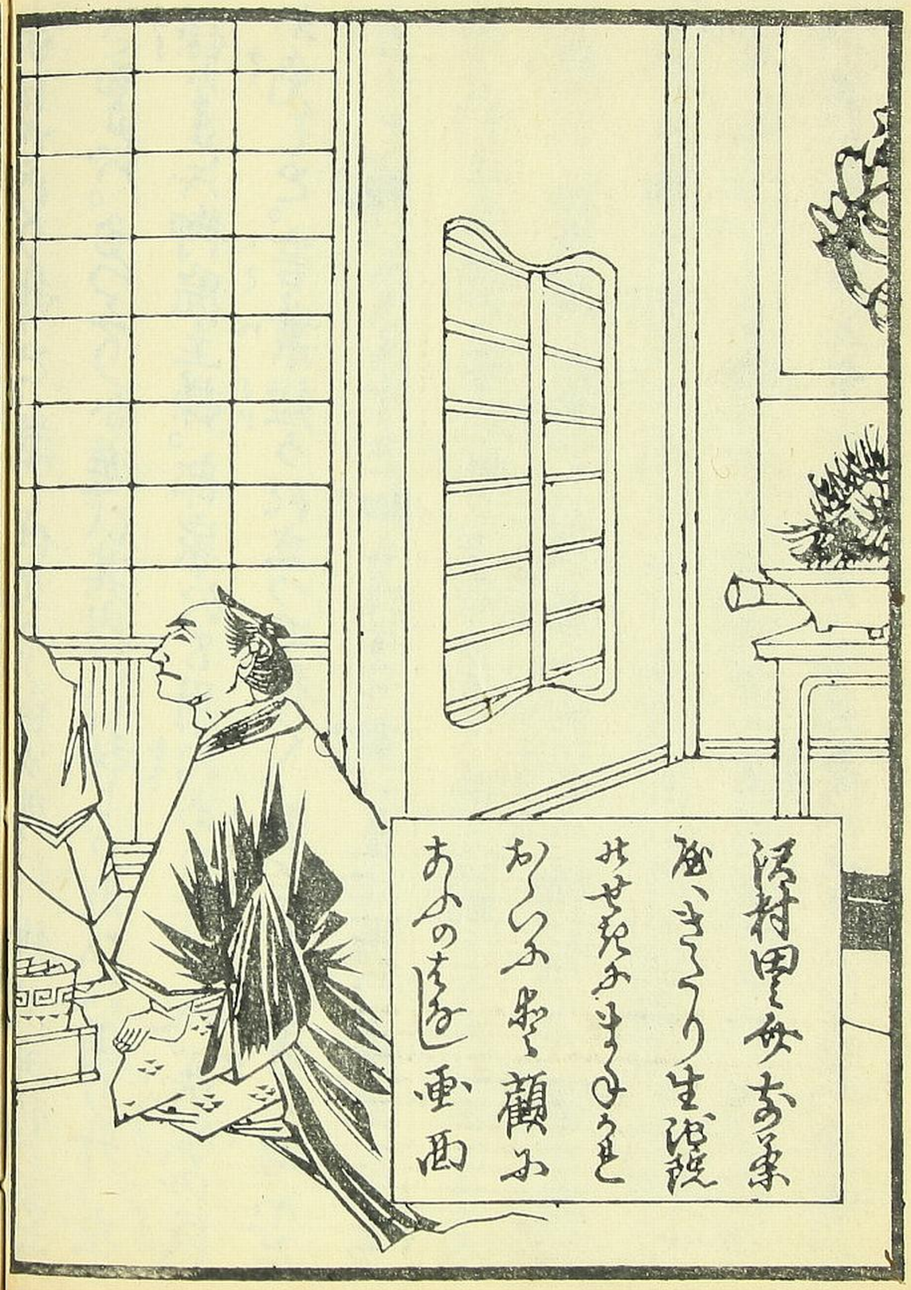
門人伊太郎も殊の外に持て余し若且那モシ聞玉へ斯く諸方々呼に来る。貴君様の顔貫る多くて其評判の高ひ故此業躰に取つて見るべ。是に上載す悦び申誰にも是と称ぜる。不人氣なる身は是非も申何卒御氣を直せらるる顔貫の花の散らぬふでお否の座もあるべ。其所ゞ勧めらるる事にてまこと其中には御氣晴らしに成り外事も有り外々と透しつ諫つ説き諭せど子供心の汙意地に唯イヤくと言ひ募り。果ゐ例の疝癪に側なる湯呑を姿見の鏡へ撲地と投附るさ父高助は是を見兼ね氣隨者めと思へども態と言葉を和らげて

ユリヤ由次郎よ何と仕るのぞ。今伊太郎ゞ其所に言うたる。皆其方思ひの氣々出るのぞ。悪く聞こへ身為になるぬ。今伊太郎ゞのつく通り。とを程顔貫にさとい迚。不人氣の身ゆや可えぬ訳さ。年も往々芸等も未熟なに。爰彼所よと顔貫の多ひ。親の身にも何わざう嬉しい。どうう其人望を失なゑゆふ。何日迄も能へ評判と賣つて。親に増つて出世ゞさせらへと。不断心に祈つて居るのさ。實に世渡りと言う程。節ない事へ無ひ程に。岩城戎屋三ッ井大丸。ゞゞ其外の店方でも。大豪家でも商賈なれば。僅女の品買う邪ケ客ゆも。粗暴に へ饗

應なひ。是とのみも世渡へ十方且那ぞ。取分け此藝人の身分程。尚更人氣と得ねいなるぬ。其貝賜貫の客人ぞ。藝人の為めや家蔵ぞ。家業へはぐへ物ぞ勤めへ節なへ物ぞと。斯う さへ思ひ詰て居りや。誰も恨む事も歎く事もなひ。今の世ぐりへなへ昔ぐり。皆此道の名人達も。辛苦の勤めの功と積て。今の世迄も名ぐ殘るのぞ。自已の身ふも覚へのある事ぞうぞ。無理とへ更めや思とへなへぐ。夫ぐ今言う勤めぞぐ。爰と能く合点仕や。今日へ病気とう虚言ひても能いう。平常ぐう夫と心掛て居るう能いと。流石功者の父親の。花も實も教訓に。なんと返事も涙組。差俯向ける

雑言と。汲取る側の伊太郎も。俱に袖とぞ濡しける。その折柄に二丁目なる。中菊方ぐう若且那に。只今ちものつて言ひ入まる。声ぐくぐうも由次郎へ。顔ぐう上てヲヤ嬉しいと。伊太郎にお向ひ。直と行くぐう掛らぐと。聞く伊太郎も。命親も。斯く迄教諭と聞分る。利発の程と感じ入て。何へ兎もあと。お天気の替らぬ内と取急ぐ。中ふも父へ伊太郎に。場合の呼吸と申し含め。流手な衣装と着替させ。中菊方へ急ぎ行く。座敷へ通りて客人と誰ぞと見とべ岩立図らん。忍の岡の生池院。由次郎と見るうも。速く爰へと掌と取とべ。由次郎も嬉し気に。心置きあき

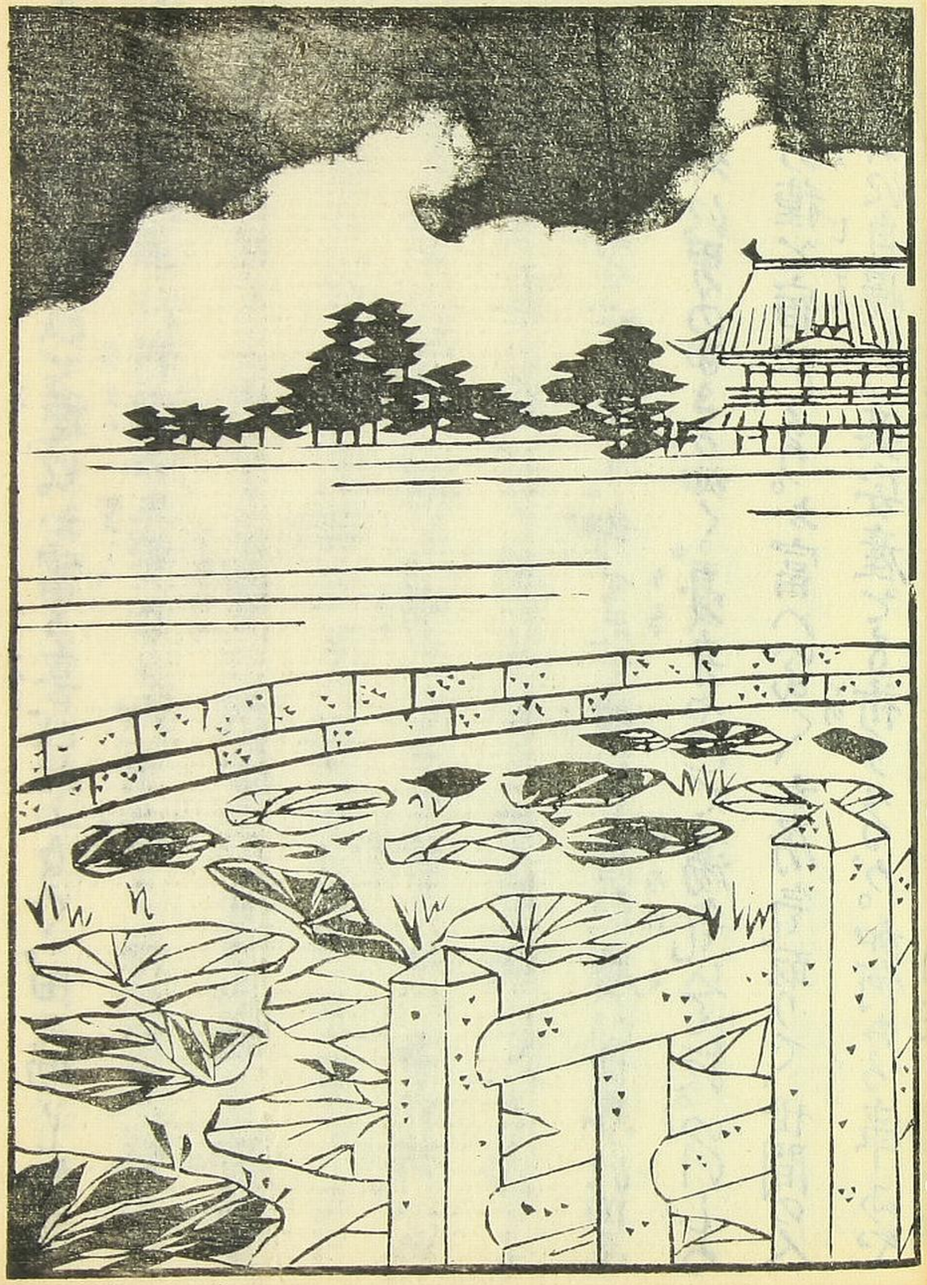
体裁に。伊太郎も煮てう。此生池院の贔屓なる事。うく
も知つて居る事なれば。初會の座程に気も張らずと。由次郎
が気も推量なし。我も落附き院主に向ひ。庇蔭とりて
若旦那あり。御贔屓方が多くして。先刻より高らの屋。
まつこへ此字屋紀の國屋と。御呼入まい沢山なるぞ。どうい
う訳う若旦那あり。何所へ往くのも五不兼知にて。其説
諭に困り升と。二丁目の中菊方と聞くこう日和が昏
り出し。早く行うと私し迫。無間に急うとて参り升
とう。思ひも寄らぬ御院主様。是い全く五貫贔屓の。夏まい
に附けて若旦那に。虫が知らすといふりのう。嫉智奇珠
の日でありう升と。詳し仕なが〻由次郎に。御院主様のお招
きあるとべ。めつてうお遊び其内に。私しが迎ひに参り升。左
様なるとべ御院主様。部家にも用向あり升るとべ。失敬の段
お免しと。言葉短うに立つて往く。流石そなと者の端わど
有りて。粋とさうすと知られる。斯て生池院い由次郎にうち
迎ひ。今日此中菊に私しが居る事。誰に聞さう不審しさよ
と。問へば由次郎お笑て。當家に貴君が御出とい。誰ぶも聞
て仕ませぬと。初日が出てうり毎日く。うふ見物にお出うと。
舞臺うして見物の中と見ぬ日い有りませんに。うふ不計
拠數に居らう志ありと。ちらうと見受い仕ましなるぞ。平常に

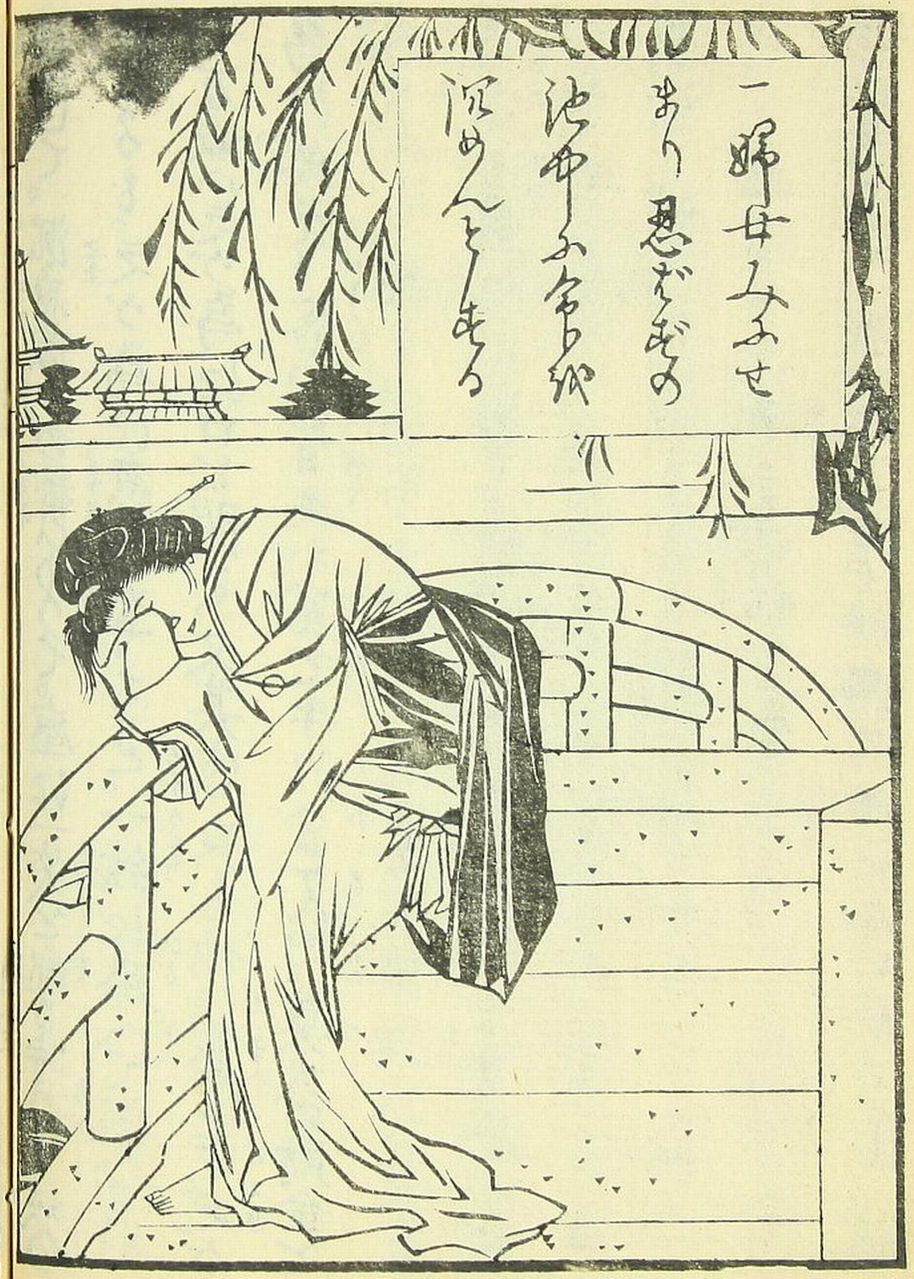


皆つゝ拵敷の体裁（是ハ生池院ゞ由次郎と試し見んと態と斯く計ひしなり）然し扱う若ひ衆ハ正に当家の人なりと見認し仮に先刺より。外の茶屋より招るとても。皆不兼知で断り外とも。大方貴君ゞお招きの事もあうと實々に樂しと待つて居り外と。折柄当家のお使ひに。成丈急ひで参り外とも。最前拵敷に居らつあると。正にお見うけまうしと故。貴君に違ひの無ひ事ハ。百も兼知で居り外ハ。私し一人の了簡なるべ。伊太郎ゞ不審ゞるも。めつとも有外と。聞くより院主も由次郎の。其才智を密に感じ。尚寵遇も厚くして。流石狩氏の言葉迎。逆縁なゞらの怪しき夢も綻びし事も有るより。弥層愛惜重なりて。果ハ蓄財什器迄。此由次郎に吝まず授ぶち。終に其身も零々落仕て。不圖辟土に死を遂て。恐念を残す物語の其緒口とぞ知らるゝ。斯て沢村由次郎ハ。いまゞ幼年なりと雖も。後に三府に名を輝うす。實に掬擅ハ二葉より。才智の程ぞ顕るる。此由次郎十五才の春。大阪より市川市蔵（尾上多見蔵の次男）東京へ来りしに技芸勝れて衆に越しより。大ひに土地の人気に可ひ。ある時守田座ゐて。文理一重の狂言せしに。市蔵ハ文理由次郎ハ一重の役と勤しに。其情合の深くして。評判も能く大當り。

とをせしゐ。市蔵大ひに感佩をし。ゐる幼年にて技芸の斯く精密ある事ハ。中々他人の及ぶ所にあらず。斯る秀才とハ迄子役にをし置くべき。早くも大人並にをし。世間へ披露させんものと。由次郎の家兄ちゐる訥外に此事語りゐる（此以前に由次郎ゞ為ふも父ちゐる助高屋高助ハ。兼て信仰の讃州ちる金毘羅神へ糸詣せんと。上阪の途中尾州名古屋表にて。病気の為に没死けゝ。長男源平紀の國屋の家名を継で訥升とそハ改めゐる）兄ちる訥升も大ひに悦び。早速市川海老蔵又ハ森田勘弥の老分ふも。評義を遂て。沢村家ふハ田之助曙山の俳名あゝバ。既に二代目迄も續き上ハ。由次郎と以つて三代目とせんに。花方ゝも似合ひなり迚。由次郎に田之助曙山の名を續ゞせて。安政六年十二月十日其祝ひを行ひて。田之助の名跡を披露ゝ。猿若町の俳優者流其外作者お囃子連。ゐり附家元淨瑠璃語り。画工隣春に至る迄。膳を供じ盃を勧め。古例に任せてその式を行ひ。車最重の折ちるに。如何ちる事ふや田之助へ供えんとせし配膳の。左の足の折ゝられゝバ。兼ての短慮忽然に。くゐつと怒りて歯ゞをゝ。利足上げて足折ゝ膳を。ちつと蹴ゝバあハ如何に。又片足の折ゝられで

珍味佳肴は散乱あて。席上は落花狼籍。是が為めに並居る人々。眞ハを醒して手持不沙汰。或は諫め惑はなぐ免。挨拶そまく帰りる。是難病に罹りぬる。前表とあそ知らるとる。偖田之助の名披露の。久費も例の生池院が大金を投打ゑとび。諸方への贈品。格外の立派あて行届うざる所もなゑとび。慾ふか眼の垂さ江湖の人情 兼て高評の由次郎に。尚弥層の評判よく。萬口の人望得し其上。昼夜別らず俳優道に。實を入る練磨なゑとび。安政七年十六才にて。女形の大立者となりこうる。茲に其頃柳橋に。お富といへる藝妓あり。素より高名の紋妓ぶして。沉魚落雁の姿ひゆうて。座に一笑を配る時は。千妓の艶なるも。えび為に忽ち奪ゑとび。一紋に添へて訊へる時は。万妓はえび為に口を閉る。又其容貌も他に勝ゑて。えび為に湊える客は。皆此お富と手に入ゑんと。莫大の財金を吝まずして。種々心を尽すと虫ども。意気張強よる東京素性。金銭抵には眼も掛けず。尚素気なく食應へば。客は一層肘を焦せど。更に肯引く事の無ゑとび。此事迄も評判高く。此泥水に住ゑなぐ。当世不知の訳者すと誹しる人とも多くりる。斯る名妓のお富なるぐ。ふと沢村田之助に思ひあゑとて。夜と昼となく神佛に。祈り心の届さてやつは




一婦女みみせ
まり思ぞぞの
池中ふかく
沒めんとする

ふ八田之助と思ひと遂げ。お富う喜び此上なく。田之助も幼年なれど。諸事に利発の生質なりしゆ。出逢う毎に其程よくお富が心に可うふ。さも正實に附合へハ。意氣張り強き女氣も。戀の一字に忽然鎔け。日に増し夜々増し可愛くなりう何哉田之助が心に可う様と。媚と尽せる余りあハ。身に貯への財ハ更なり。客を欺ひて取る金も。皆田之助に入れ上げても出し惜しき心もなく。却て之を嬉しく思ひ。廣ひ世界に田之助あり。外に男のかゞ如く。憂身やつして湯気込しに。いしろ田之助の種と宿せしゆ。お富ハいふく女房気取りで。世間の人ふも蜜に自慢し。其安産とも祈りるゞ。如何なる事ふや

田之助も。初めの程ハ隨分品よく。愛敬ひとくも附合ひしゞ。何日の程ふう秋風立て。五度ハ三度三夜ハ一夜と。逢う約束の首尾さへまゞし。適に逢う夜も難面言葉。初めの頃ハ心も附うねど度重なれば気もたまゞす。我身に聊覚へなくとゞ。若のや主の心に背き。機嫌損う事めや出来じう。又ハ此身に増す花の色香に換て捨てらるゝう。そハ兼てしも名に高き。主の事故引く袖の。數多あるとハ知りなゞ。種迄宿せし此身なれば。未でハ妻と樂しに若も此侭捨らるとあば。なせ此身も名と賣りて。數ある友ふも崇められと。二座と下らぬ其上に。田之助主と此由縁に。かゝる事も評判るに。未も得遂げず捨られと。後う指

とさゝもとめべ。どの顔さげて世間の人に。言葉やうさそう愧りしや
何率主の気に可ひ。此身の難義にあるぬるよと。神に祈り佛に願と
或ハ詫つ或ひハ口説。兼に言ふもて遣る文に。巻帋さへも痩せ
果て。問へる積病も幾度う。待てども何の返事も来ず。今ハ
言ひ寄る綱切とて。波間に漂う捨小船。何と詮方泣くもぐり
此時お富ハ心附き。生池院あるお座首とて。兼ヒ主との中と
ひ。我身の上も知り玉へべ。此御方に願ひ上。主の機嫌の直
るよう。執成頼む外なと。獨胸底に問ひ答へ。拯て思案の
上野なる。忍の岡へ来りつく。彼の生池院に面會ゆ。事の巨
細を殘りなく。詳して只管歎願の。涙に真實願うれ
ども。如何なる事にや生池院も。是をとゝとも肯ずず
爰ふも素気なく言ひ離さゝと。いふくなのその道も絶
へ。力なくく立出しづ。つくく心に思う様。迚も可ぬ
此身の願ひ。生て面愧さらそうよう。死ぬるぐ増しとおもひ
詰め。さも恨めし気の面持ゆて。田之助の方にうちむひ
風の便もあるめとべ。後日噂に聞玉へ。我身ハ貴身に捨
らゝて。今此所に死すなとべ。定て貴君ハ手元の邪广
拂うて嬉しく思さんぐ。人に恨ゝの有る物う無き物う。
かもう安さハ男気と。諺に言へど情ゆや。幾夜重孫し
私言ゆる。末ゆハ妻よ失よと。如何に愚鈍ゆ我身迚。

とそ欺むき人今更に。其言葉さへ醒めうち。此むごたらしさハ何事ぞや。種迄孕せし由縁なるべ。はしい詭しき心根も。なるべきものと胴慾か。まこと此幼稚もいぢらしや。とめき腹に生と得て。闇き所より暗き道。是皆父公の所業なるべ必らず母と怨うむかよ。ヤラ恨ゞめしの田之助主ヤラ忌とこの秋主よと。怒りの歯噛髪逆立。一途に迫るかんか気の。忽然修羅の其形勢。たしなむ道も不忍の池や恨こも深底へさして。ざんぶとそへ身と投げて。衣ゑと墓なくなるふる。畢竟此か富の怨念。后に如何なる。たハ巻と次で見玉へし

妻重艶男不理袖前編終

沢村田之助病原筋書 妻重艶男不理袖後編

斯て沢村田之助ハ。絃妓か富ゞ不忍の池へ。溺死せし訳聞より。素より剛深し其上に。種迄宿せし。覚へあるゝ。一度心驚けゞ。生質薄情の性なるゝ。只一遍の追善供養も営む心ハ。ゝこそ。却て眼上の瘤と取りと。心の内で窃ろに悦び。更に此事頓着せゞ。心強くも暮しゐる。爰に文久四年の頃なるゝ。東京守田座に於て河原崎権十郎（へ方今九代目市川團十郎）市川九蔵沢村田之助一座あて狂言ハ竹大日如来。切狂言ハさらゝとか富の芸題ふて大当りとなせし時。或る日河原崎権十郎と。か竹大

日如来の縁起の事に因り。貝賈客の前に於て口論に及びしゞ。側に居合せて市川九蔵。是と中裁せんと両家へ至り説諭せしゞ。權十郎い兼諾せしゞ。田之助い聞入るゞ兎や角故障言るふぞ。九蔵も今い困じ果て。終ふい髪を切つて迄。漸やく是ゐて。事一済しゞ。えゞ為市川九蔵い舞臺も両三日欠座せり。嗚呼上手の掌より水ゞ漏るゝと自分の恨らゝと他に譲り。中裁人に迷惑させるい。温和と表の女形ゆい。相應せざる行ひあり。明るべ明治二年の三月是も新趣向皿々卿談の狂言にて。大當りをなせし時。田之助い欠皿の役をなし。継母に責らゝ殴ゐて。如何して懸我

なせしや。左の足をさつく痛め。是や沢村田之助ゞ怪疾と病む初めなり。茲にまつゝ符合なしなる事こそなれ先年柳橋の絃妓お富と馴るを染め渠ゞ腹に種迄孕せしを出産の事も遂けず。情けなくも離縁せしより。お富い是を深く恨ゝ。不忍の池に入水をしようる（訳い前編の末に有）偖此お富ゝ死せしゞ三回忌に当り年。同し名のさらるとお富の。役をなせし真行中。思ひも寄らぬ權十郎と。狂言上の口論より。九蔵に迄髷を切らせ。恨らゝと受し其上に是も其頃柳橋に。珊瑚珠と諢名せし。藝妓何某を妻となし。まつゝ其い同所の藝妓なる。小花と呼ぐると妾とい

女子（名ハい孫）迄儲けし中なれど。両婦とも に一年と。添遂もせず離縁なせい。是全く溺死せしお富が怨念のなす所なるん。会まと8人望ハ盛んなりしが。兼て見賄賂の生池院ハ。昨明治元年丙辰歳。上野ハ戰爭（官軍と旧幕臣）の巷街となりし時。宮様の供奉とせし幕本（旧幕臣）彰義隊と倶に。奥州の土地へ落行し侭其後便宜ハなりなり。さるとも生質薄情なる田之助なるとが。大恩人の事なるとも。更に之と心ふも掛けず其侭にとそお捨置なり。自是先年慶應三年五月の頃。東京市村座におの。沢村田之助 姐妃のお百の新

狂言と奥行なさんと。桃川燕國（講釈師）と我家へ呼び寄せ。講談の筋と委細聞取り。既に正本も出来上り。近日初日と出さんとする時。田之助忽然左りの足痛く出し。立居の自由ハ言ふも更なり。其痛も又尋常ならず。如何なる訳やと案じ見るに。是ハ全く先つ年。皿々御談の狂言中。欽皿の役を勤免し時。左の足を怪我せしが其時早速療治せし故。日多す平愈なせし故。小細の事と思ひ居りしに。偖ハ舊疵再發なし。斯くこそ痛める事なるべしと。目沢名倉の二函に憑く。百方手術と受るとも雖ども。其功験なしも

ツヽカザ子

見えず。是に依りて両肉い素より。田之助も困り果。彼是なす内指先より。次弟に腐りて膿血出て其痛を堪へがたきとび。三宅權齋伊藤玄扑の両先生に療治を乞ひしが。此又両肉も手を尽くし。其切漸々顕れて一旦平愈をしたとど。暫時ある内又差發り。苦脳骨髓に徹しなるとび。佐藤氏松本氏の二肉を頼ま。其病根と胗察せしむるに。両肉も深く熟考ま。是はまつたく疽脱の症なとど。世にも稀なる難病なとび。通常の療法あてい迚も平愈なるべし。指と残らず切断せねば全快なす事覚束なし。聞ひて家族も大ひに驚き

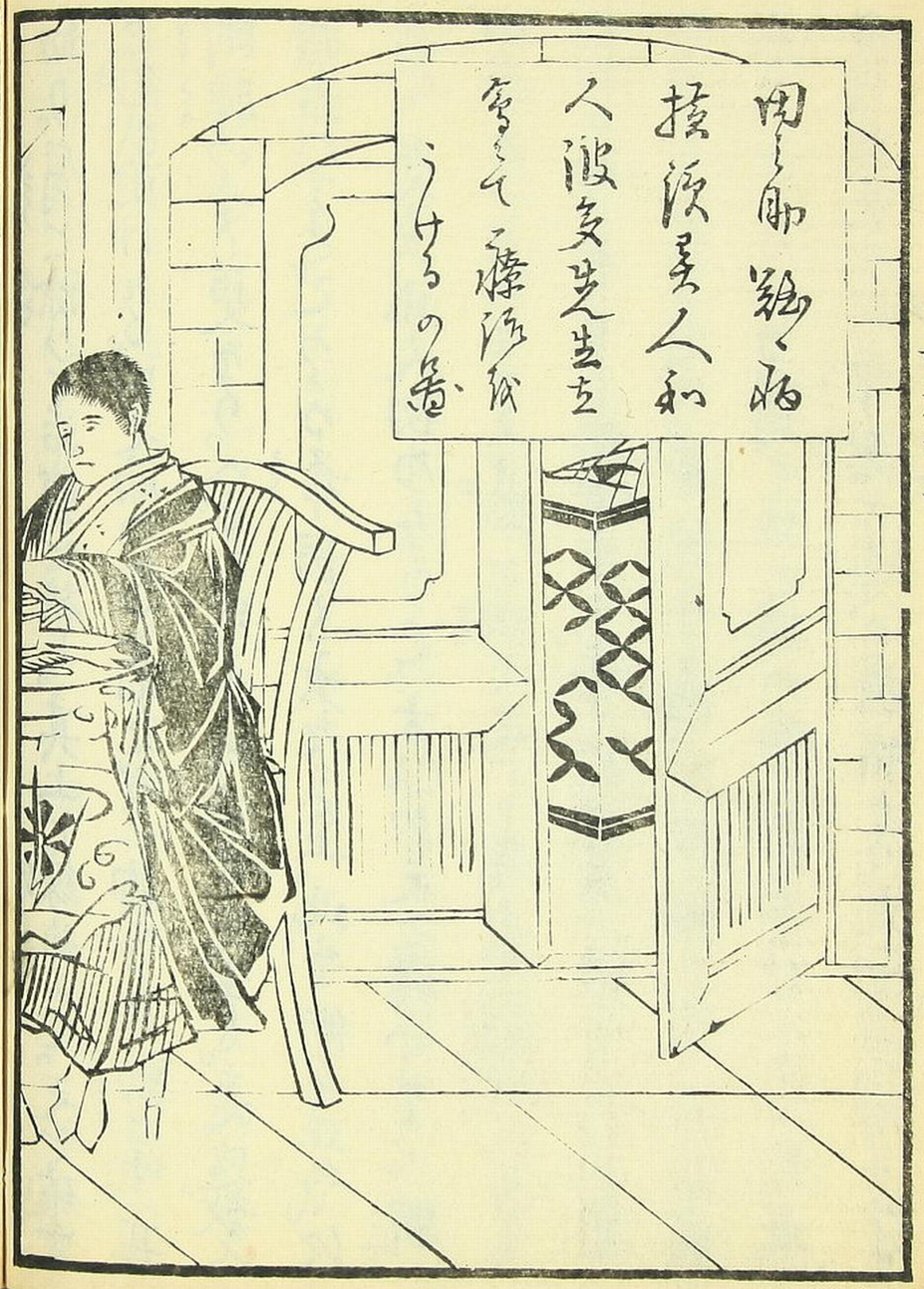
難病平愈の為なるとハ如何なる方術も受ねハなるねと通常の人てさえ。身体不具になる事ハ。誰衆も忌むべき事なるに。増て秋姿の艶優を表に飾る俳優中の殊に女の情と深く。見せ物べなる業体なとび。両先生の言葉に悖り。却つて難義に成るハ知られど。外に宜敷方も無さやと。難病ハ苦しくなるハ。さて業体の事に附て。親族の商議も區々ゆえ。終ハ病院に依頼をなし。養生厳重なりしとび。さしも稀世の難病も。平愈ハ至らざれど。半月程ハ痛も和らぎ本人も大ひに脱び。此様子なハ全快も。近ハ有りと親族まで

脱とびの色顕はれしが。或日女にの閑善事件の。発足し訳の出来しより。兼ての気隨田之助ハ。以ての外に立腹せしが。夫に依りて田之助が。足の痛みハまた差発り。今迄辛苦を尽しなる。病院の術方も水泡なり。また痛みさへ初めに倍し。さも嚙切らるゝ如くにて。其苦しさハ言葉ふも述べがたく。之に依つて我家に帰り。親族中ハ昼夜とちく。看病怠りなるなるが。田之助ハ苦痛の余り。発熱に浮うされ妄言吐き。其病床を狂ひ廻り。眼も当られぬ有様に。看病ふも持て余し。老母ハ素より妙おろめ。かゝるも倶に心痛をし。或ひハト笠稲荷さげ

此所の兄法彼所の祈禱と。種々様々に奔走さるもど其功験のあらうなもび。偖ハ先年溺死せし。お富が悪霊のたゝり所うと。お富が位牌に田之助と。贈姻の。盃をさすのこのゝ。幽魂菩提の為なり迚。中山の行者を請じ。両國の水上にあをて川施餓鬼の修行を善根供養尽せしが。是ふも何の験もなく。大立者の率たるもび。数多貫頭の客なるも見舞の贈品その外に。免せよ角せよ懇切あり。其外門人諸出入者。芝居係りハ言うも更なり。明葦中に至る迄。皆田之助に力と添へて尽力をもど。益々痛みの励しるもべ。又も

洋学者の別所氏の療法受る間もあく。毒気い忽然骨に徹り。脇より下い総一面。紫色に昏り果て。痛い瞬間も止ざりなとべ。今い術方泣き入つて。死を待つ外いなき折柄。其頃相州横濱に。寓居となせ西洋人。ヘポン氏といふ医師ありて。如何大病患難も此先生の療治を受なば。全快せべと言う事を。者婆扁鵲も及ぶまじと。其高評の有りなとべ。容躰を厭う俳優も。流石命の悲しさに。前に佐藤松本氏の。言葉もあるとバ横濱なる。ヘポン氏とふ依頼なし。診察をなひ其上に。彼の先生の言葉に援りて。指なりと足なと。命の助る事なるとへ。切るとも何角厭はんと。高議を爰に一定し。門人なる羊十郎を。横濱さして先へ下し。彼ヘポン氏へ依頼致させ。田之助も談地へ至り。辨天通りの大勘に旅泊し。同年九月十五日午前才八時。彼のヘポン氏の旅宿に至り。ヘポン氏に面謁なし。発病ゑの来歴を。詳細に述べて。ありなとへ。ヘポン氏い譚官を以てえと聞取り。兼諾なして田之助の。足を出さしめつゝく眺め。小首に傾け熟考なし。波多先生(皇國人官醫当時東京八丁堀北島丁住居)を請じ肋科を求め。用意十分整ひなとべ。田之助を療治場へ伴誘ひ。長搨上ゑ

卧さしめて。コロオルホルム（洋藥）と鼻嗅せんとせしに。田之助心に思う様 此香藥と用ゆるハ。何とゝも大傷故。定めて苦療に苦しまんと。夫と察して香剤と。我に用ひて神魂と。忘るさくん為なるべし。我從来病氣に據て苦と受る事既に五ヶ月。早其痛こゝも馴るたとべ。今骨肉と切らるゝと。何の恐るゝ事ゆゆる。願たくハ正氣にて療治とをして賜まるべしと。此香藥を辞したるとべ。ポンヘ氏をしめ波多先生。大ひゐえと感佩し。さゝべ所望ゆ任さんと。乱藥と黙じ解刀と。逆手に採りて田之助の皮と剖き肉と切り。筋と髓とと小細に分け。鋸と以て骨と切り。腐と除ひて治藥と施し。其上と練絹ゆて。えと確定と結ひ附けゝる。田之助ハえと見なゞゝ。弼も身動せず。其剛膽ゆゆ更なり。ポンヘ氏をしめ波多先生も。是迄數人療治ハすれども。ゝゝゝ希病も少なゝ上。此手術と正氣にまゝて受るハ此人初めなるゝと。大ひにえと感心せり。腕の療治と受なゞゝ。其春と囲と居し唐土の。関羽に劣らぬ田之助ゝゆ。まゝ此療治と速ゝに。煙草一吸仕る内に整ひ洞せしヘポン氏ハ。華陀ゆる勝りし神医ゝゆと。賞美ぬ人こをなゝりゝる。斯て田之助ハ療治と受け。ヘポン氏波多氏両先生に。厚謝と述べて旅宿なる。大勘宅へ帰りゝる。

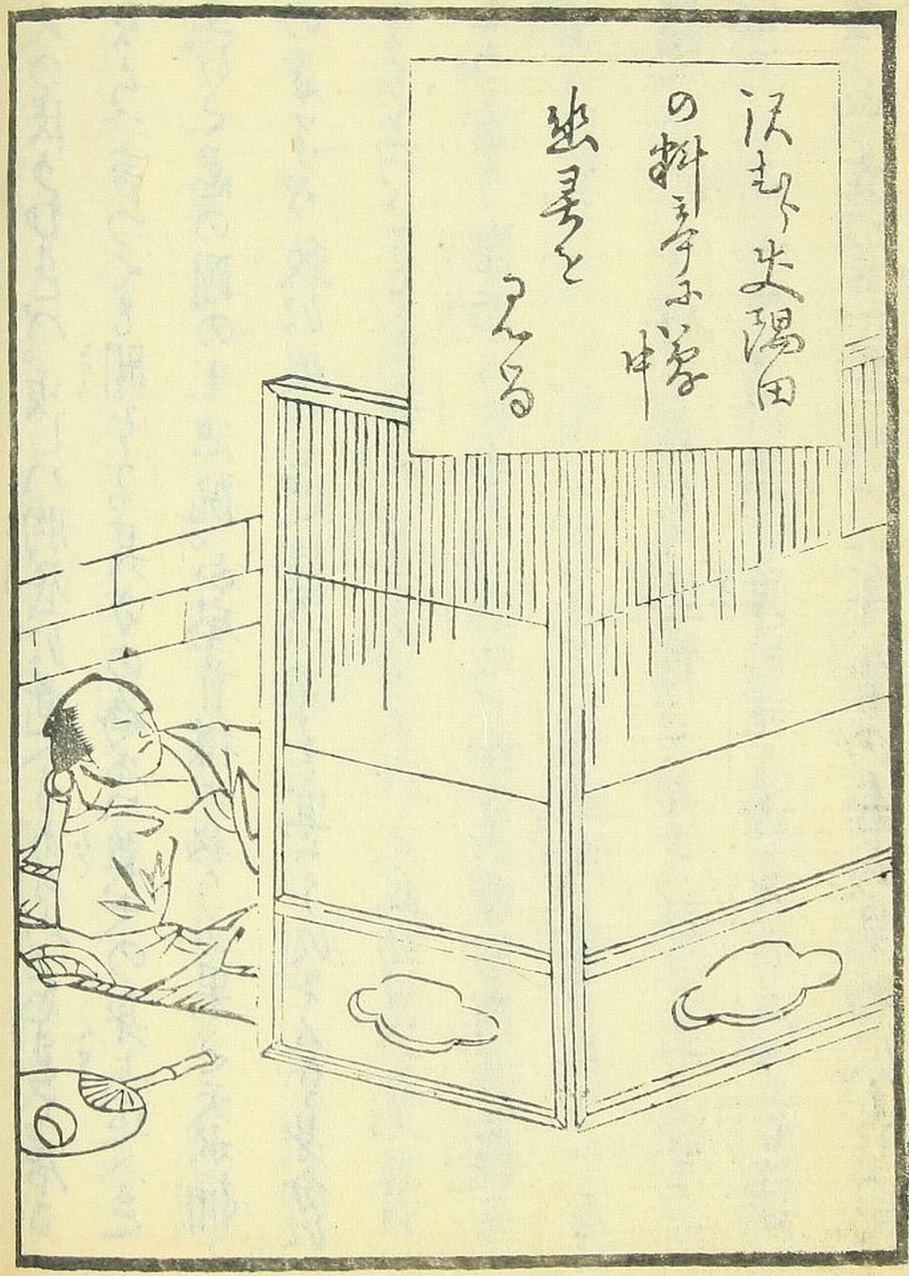

用事御願ひ申
接待員人和
人波交生生立
寄そて藤沢氏
うけるの為

偖其夜より田之助は。初めて悪夢の覚る如く。忽然足の苦痛と忘れ。森食とも に平常に帰れば。田之助は言うに及ばず。親族門人に至る迄。其喜び大方ならず。されども猶てへポン氏の。厳誡あれば。身の起き卧しも慎しみて。其外補方怠慢なく。半月余りは横濱に滞留して。同月の三十日。漸く東京へ帰りぬ。爰に於て田之助は。不具なる身とは成れども。原の如く大丈夫に。全快なせし事なれば。顦顇容は素より。芝居掛り。諸出入人に至る迄。其悦び門前は。恰も市を成す如くなり。是に因りて田之助は。ヘポン氏への礼かたち。横濱なる下田座に於て。夜東亀蔵同三津五郎　沢村其蔭尾上多賀之丞　兄なる訥升一座にて狂言は白石噺と奥行なし。妹對面（新吉原三階の段）の場にて横濱御礼の口上あり。此奥行大當りにて。既に東京猿若丁三座の人も見物に来り。各此狂言を我座に於て。奥行せんと田之助に引合に及びし故。何れの顔も潰さるべず。遂に三座へ一幕づつ出勤をなしたりける。其後或人の勧めは継足と言う品を調製なべ。歩行の扶助を拵へて。舞臺の働き も宜敷なんと。爰ふあいて其頃おひ東京にては名もたかき生人形の細工人。松本喜三郎と呼寄て。此事委細頼まけるべ。松本氏は兼諾なし。不日細工出来上しなるべ早速之

と一見なすに音に聞ゆる名手なるべ。寸分違はず出来上り
しが。田之助は大ひに喜び。喜三郎氏へ厚謝となし。是を用
ふる事に極りしが。悲きひうの日を経るに従ひ。田之助の傷口
愈るにつき。次第に肉の添う事故。折角松本氏の精神を
凝らし調製なせし品なれども。間もなく寸法相違仕て無傷
の足には不二合なるべ喜三郎氏も是を聞て。大ひに後悔か
すのみならず。我此職にのりかゝる不覚と仕出せしと。作
料を辞退なし。其後如何程依頼といへど。更に兼諾あらう
なるべ。やむなくと得ぞ亜米利加人に。金三百円にて継足と
調製を用ゆる事となりうる。茲に明治二年三月に

守田座へ出勤せしが。ちゝぶざるも田之助は。猿彦道の社會に
誘引れ。或日隅田坡の下の穴(鰻屋の名)に遊びしが。萬事
切者の俳優なれ。此道なれば下手なるう。習えぬ経は讀めぬの諺。
大ひに塞目に敗北なし。立さぬ足ろう貯えへの。お銭もなくなり
巻き取られ。無念に思へど是非もなく。唯呆然と外面の方
覗く折柄一人の出家。身の構綴と纏ひなが。髭は荒き
野の草の如く。痩衰へし体食なて。さも上拮し聲として
モシ田之助様由次郎様と。二声三声呼びかるるへ。思えず
知らず田之助は。ふり返りて是と見れば。豈図らんやこれ
あそは。幼年の頃なりして。大恩受し忍の岡の。生池院なそお

ヲ[illegible]とび。心中大ひに驚きて。如何なさんと思ひしが。偖はあの生池院の。先年奥州へ赴きしと聞くる侭でありるが。斯く乞食となりるへ。如何なる訳か知らねども。斯くなる者に言葉をかけさび。世間の体も愧ぢしく。すて後来の邪ナを[illegible]び。逢ふぬにあらじと思案を究め。心強くも見ぬふりして[illegible]ア酔うさもく此ふうに。今日程酔うて事はなひ。酔えで何ぬも辱へぬと。鼻譎交りに雑言吐き。態と外面へ聞あるふう。果は忘なる小障子を。閉る袂を外なるを食確然と捕へて怒りの眼色。コレ田之助さん胴慾ぞ。何ふもそんあに見ぬ振り仕ぞり。薄情にさるる覚へはなひ。其方も人の皮をむとび。ぬしは胸底に覚へもあらふ。忘れて居るならう。言つても聞ぬう。其方の為ふは莫大の身上迄へを上げぞ。忍の岡の生池院。お屋首様の移りの果ぞ天水掃の子子ぞ敢に成つて迚烟苦ぞ子も宜らうに。そんな身分になり上つて。余程資本も入れと上げぞ。此坊様を見忘れし。余り難面仕方やと。死ぬめば此方は眼に角立て偖も源とひかた食ぞ。聞くもあの長法談。食ぞ欲しくを厨へ往て。下婢と頼むぞ近道ぞ早く往さねと振り切るとて尚も放さぬ涙と浮めぞ。ぞ源とうらふぞ言絡べなるぬ。立つ日は早ひ十三年。昔の春の見物にそどめて


沃土史陽田
の料亭ふ峯
中
出景を
ゑる

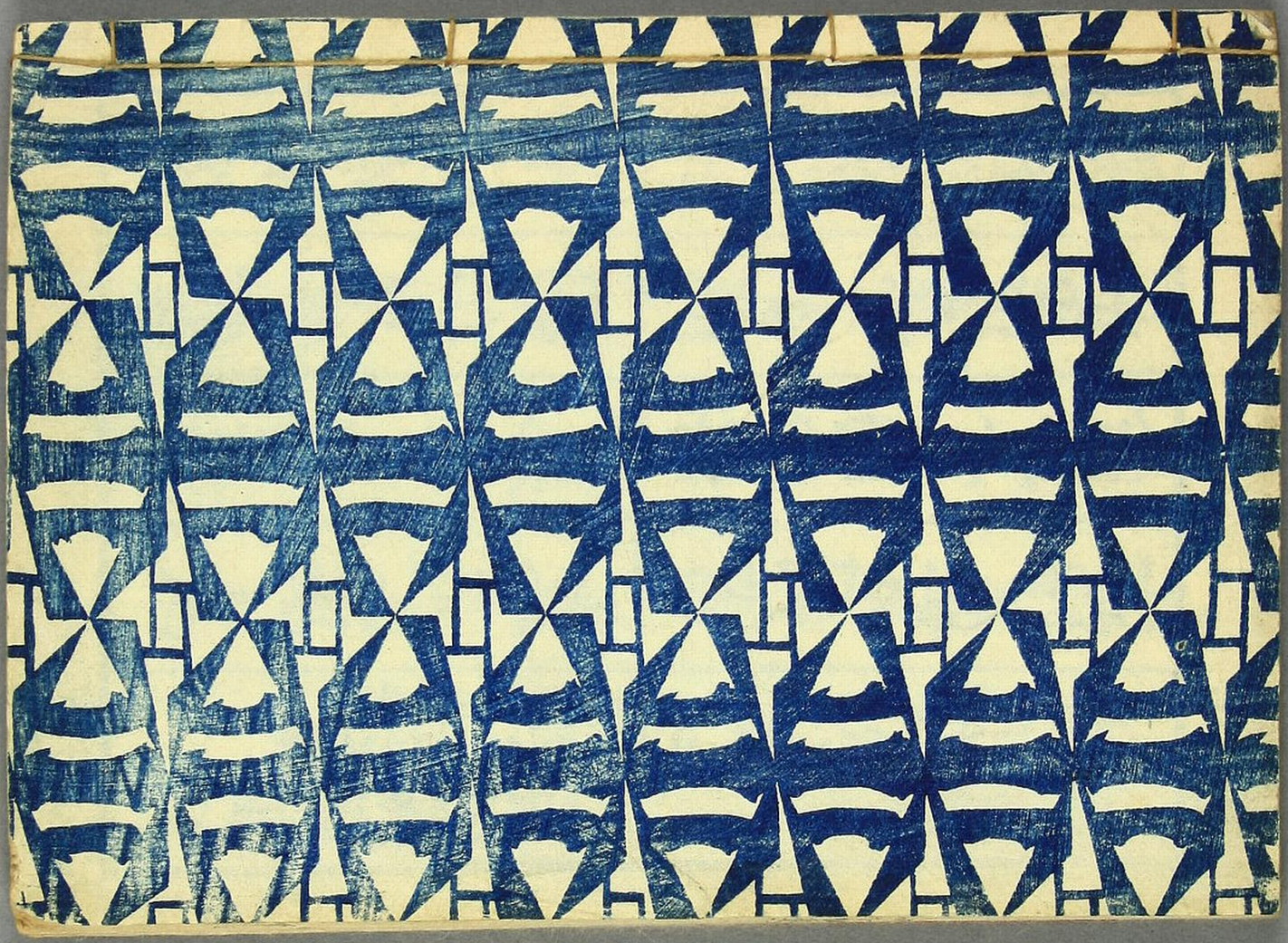
逢うて百両の。金の鎖りで繋ひざる。今さら思へば腐り縁。其方故に御門主の御前の首尾も損う金策其債財に責らるとて。身の置所もなさよふになつさい其方に入上げく。金の數さへ不知程。折節幕府の諸士の脱走。忍の岡に集合たし。彰義隊と名と眉し。宮と守衛と聞し。我又其手に駈加さう。終に奥州へ落行しに。其方に費へし金罰ゆや。大悲の佛に見放され。仕る事なす事皆齟齬ひ。生甲斐のなさ身となり果。うとくうへる東京の故郷へ飾る襤褸の錦。綴さる糸の縁と求絶頼さ寄さう甲斐もなく。斯く薄情ふも振放つれ。義理も人情も知らぬ奴。ヨシ夫なふば世の中に。人の眼さの有物う。ゆさ無さ物う其方ゲ身に。巡る因果に有るべきぞとさも眼色にて白眼詰る姉ゴさ。田之助に色青ざめ。立ふも立ずず四苦八苦。思ひずアッと我声に驚きかゞ眼さ覚せば。是轉職の夢ぞ有りる。斯て其夜より又足痛さ出終ゆ指も腐り出。左三本右三本切捨し車なれば。芝居へ出る車もなふねど。河竹氏に頼さ國性爺姿の写真繪とふ。新狂言と花と成。是や沢村田之助の實に一世一代の。舞臺の果と知られたり。夫より病気も次第に重り。因藥の力も見へずして。既に命も終らん

と仕る時。朦朧にして枕邊に。僧と女の姿顕はし。眼を怒らし
歯をくひしばり。自眼詰めくる怖しさに。吁やと一声田之助ハ
其儘閉絶なしと。家内打寄呼び生しゝべ漸やうに蘇
生なせし。事の形勢物語り。アヽ我なゝ愚なり。三十四年
の今日迄因果應報有ると悟らず。身に悪行を働らきし
其報ひて業病煩ひ。母兄弟にも辛苦を掛け。其上先立
不孝の不孝。何卒不便と思さるとて。我此所に死を遂ぶべ
生前に露聊ら。善根なしゝる事なるべし。未来の程も
恐ろしく。何卒此身を生池院。又ハ富の跡迄も吊らハ
なして玉ふとと。涙なゝの遺言に。親類ハ申に及ばす
門人等に至る迄。泣ぬ者とて無りける。時に明治十年
七月七日午後十時。三十三年五ヶ月を。終に其身の一期と
ぞ。冥鬼の数に入りける。哀れ墓なき事共なり。法
名ハ深廣院照誉盛務信士と号け。寺ハ浅艸誓願寺
の塔中。自應院。墓ハ本堂の西手。井戸の向うにあり
嗚呼惜しひ哉沢村田之助。いまゞ老年の時もいまゞず
僅ら三十四才ふして。此業体の事なれば。今ゞ盛りの年
齢なり。容貌ハ衆に勝ぐれ。人望も多く他に越へて。金
の生る木の大立者も。人の怨念の報ひゆや。世ふもまれ
なる業病煩ひ。爰に天札なしなるハ。怪力乱神を語らず

の。其古語にあると虫ども。眼のあるうなる一物語と爰に記して。幼童の添寐の伽に供うとも。聊勸善懲悪の端緒ともなる事なるべし。看客之と高察あつて。その編輯の拙なるさへ幸ひに深免玉へ。まゝ此外に慶應元年。大阪下り大谷友右エ門に。狂言上に眼をとうけし事。又一世一代の新狂言に。檜下の藝妓中が賞語を受し事。尚沢村座の始終あり。大阪下りの事實迄。長譚はありつゝど。諸新聞ある委敷あり。まゝ猪員ある際限あるべ該概畧を記す而已

妻重艶男不理袖

十八ケ條問答

十五

妻重艶男不理袖
十八ケ條問答
西南河藩の多波
開化出世寶
徐州五月雨物語
舞踊引草
近頃在の閑書
文久眞文
徐州紙問屋
大阪角下本區平野町五丁目八番地
名門和助藏板
010190522569